

西日本走破！！式年遷宮記念、伊勢神宮・出雲大社の旅 ～～心の旅と言いたいけれど・・・～～

巻 「旅立ちにあたって」

本来、旅の行程表と言うものは、旅行に出発する以前に、それも綿密な計画のもとに作成されるものである。私自身、十数年間旅行会社に勤務し、それなりの旅行マンであったし、事実、旅程管理者の資格も一般旅行業取扱主任者と言う難関の資格も有している人間である。人様に「旅に行くときに大切なものは？」と、問われれば何の躊躇も無く「事前の準備と計画」であると答えるだろう。もう完全に昔取った杵柄のような話ではあるが、ちょっとプロを気取って言わせて頂けるのであれば「旅行は出発するまでにその半分は終わっている」と後輩たちにもよく話していたものだ。

きっと多くの人間がそう思っているだろうが、旅に出たいと言う衝動に駆られることは、実はよくある。私もそうだ。だが、以前の仕事の影響なのか、旅に出る前に、その計画の段階でなんだか疲れてしまい、実際に旅に出るのが億劫になってしまうと言う、実に損な習慣がこびり付いてしまった。「あーでもない、こうでもない」と考えるうちに、実に平凡な面白みのないと言うよりも無難なプランを組み立てようとしてしまう。きっと自分自身の為ではない、何か世間体の様なものを気にして「完璧なプラン」を追い求める癖が板に付いてしまったのだろう。こうなるともう旅なんて何も面白くない。旅とは普段の生活とは違う非日常を追い求めるものだ。誰かに迷惑を掛けないようにと、同伴者を気にするなら兎も角、一人旅ならば行き当たりばったりの方がむしろ旅の本質を得ているとも思える。なので、今回は行程表を作らずに旅に出る事にした。いや、まったく無計画なわけではない。目的はある。「平成の大遷宮」とも言われる伊勢神宮と出雲大社の両方にどうしてもお参りしたいと言う絶対的な目的はある。この為の旅に行く。

しかし、ここで大きな問題が発生する。この両神社。極めて交通の便が悪い。いや、伊勢神宮はまだいい。単独で行くなら十分に公共の交通機関は整備されている。しかし、出雲はなかなか面倒なところにある。と言えば島根県の方にお叱りを受けるだろうが、福岡からは近いようで遠い。と言うか時間が異常に掛かる。況してや、伊勢のある三重県と島根県の両方を故郷の交通機関でと言うのは考えるのも疲れるくらいに便が悪い。このどちらでも一挙に参拝する手段として最適なのは「自家用車」と言う結論に思い至った。いや、実際この思考自体が無茶ではある。だとは思いますが、そう思った以上これを行うしかない。で、ここからが我ながら不思議な思考回路だと今更ながら呆れるばかりであるが「どうせ車で行くなら普段いけないところにも足を延ばしてしまえ！」と言う欲求が湧きだしてきた。どこ？とは決めきれない。それこそ体調と時間と相談しながら行けるところまで行けと言う話だ。これこそ、一人旅の醍醐味だろう！

と言う訳で、これから記載する旅の行程表は事前に立てたものではなく、「終わってみればこうなりました」と言う結果報告の行程表になる。宿も何も予約もせず、一応五日分の着替えだけ持って珍道中は始まるのであった。

日時	行程	宿泊地
一日目 (11/18)	<p>00:00 春日自宅出発→太宰府 I C (九州自動車道路) → (中国自動車道路) 02:00 04:00 路) → (山陽自動車道路) →佐波川 S A→福山 S A→ (中国自動車道路) 06:00 車道路) → (名神高速道路) →大津 S A→ (名神高速道路) → 08:30 11:00 (中央道) →恵那峡 S A→駒ヶ岳 S A→諏訪湖 S A→諏訪 I C 12:30 → (国道 1 5 2) →白樺湖→ (ビーナスライン) →霧ヶ峰→ 13:30 14:30 諏訪大社→諏訪 I C→ (中央道) → (長野自動車道路) →松本 I 16:30 C→ (国道 1 5 8) →上高地(閉鎖)→ (安房峠道路) →高山市内</p>	高山市
二日目 (11/19)	<p>08:00 高山→高山市内散策→ (高山バイパス) →飛騨清見 I C→ 11:00 12:00 (東海北陸自動車道路) →白川郷 I C→白川合掌造散策→道の駅 14:30 白川郷→白川郷 I C→ (東海北陸自動車道路) →関 S A→ (名神 15:00 高速道路) → (名古屋高速 1 ~ 3 号) →堀田 I C→熱田神宮→ 17:00 (伊勢湾岸道路) →(東名阪道路)→御在所 S A→(東名阪道路)→ 18:00 (紀勢道路) → (伊勢自動車道路) →伊勢 I C→伊勢市内</p>	伊勢市
三日目 (11/20)	<p>08:00 08:20~09:30 10:00~11:30 ホテル→ 伊勢神宮外宮 → おかげ横丁 → 伊勢神宮内宮 12:30 → 月読宮 →伊勢 I C→ (伊勢自動車道路) →伊勢関 I C→ 15:30 16:30 17:30</p>	奈良市

ルのそれを連想させるほどの豪華さだし綺麗さだ。何となくこうなるとサービスエリアが旅の目的でも良い様な気さへしてきてしまう。ここで急に単純な私は元氣になってしまった。この時点でもう既に優に600キロは走っていたが「まだ行ける」と思い立った。いや、これだけ言うとサービスエリアが綺麗ただけで予定を変更した馬鹿のように



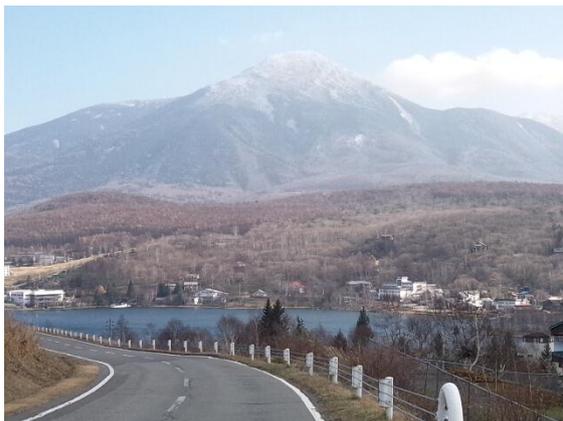
思えるが、実はそれだけではない。何より天気予報が非常に気になっていた。当初の予定では3日目以降に行ってみたい場所の天気が悪い予報だったのだ。いや、雨ならそれはそれでいい。ただ、季節ももう11月の終わりだ。雪が降られるととんでもない事になる。雪山で下山まで6カ月掛かったなんて話は洒落にならない。薄ら明るくなってきた東の天気は明るい。ならば！！と、ナビに予定を「白樺湖」と入れ直して気持ちも新たに再スタートだ。当直予定時間は昼の12時・・・まあ、どうせ行く場所だ。進むしかない。

と言う訳で、車は朝の阪神、名神の渋滞を抜けて中央道へ。朝食を軽く済ますと、周囲の風景は一気に秋真っ盛り、山国のそれに変わっていく。福岡にだって当然山はある。傍を通れば見上げる事もある。しかし、この際、多分、首の角度は30度程度だ。が、やはり信州の山は規模が違う。首を60度傾けなければ頂上が見えない。自慢じゃないが、もうこの時点で「来てよかった」なんて思っている単純な私がいた。結局六か所のサービスエリアで休憩に立ち寄り、本日の、と言うより、車で来たこの旅のもしかしたら大目標であった長野県白樺湖を目指し、車は諏訪ICまでたどり着いたのである。いや、気分としてはもう旅の大部分が終わった、そんな充実感に既に包まれている・・・

参 避暑地の挽歌～～思い出を巡る～～

私にも高校生活と言う薔薇色の時期はあったし、その中で最も深く心に残っている行事の一つに修学旅行がある。あの頃は、将来自分が旅行関係の仕事に就くなど思いもしなかったし、まあ毎日が楽しいばかりだったので「えっ、明日から修学旅行？」くらいの正に軽いノリで、それこそ自分たちがこれから行く場所の何一つ下調べもせずに出掛けたのを覚えている。では、何も調べてないから印象がないかと言うと全くその逆で、正確に自分

が今現在どの位置にいるのかは全く解ってはいないのだが、目に飛び込んでくる風景や五感で感じる全てが新鮮で、とてつもなく自分が素晴らしい旅をさせて貰っていると実感したものだ。前の晩に女子の部屋を訪ねようと教師の目を潜り抜けようと苦勞をしていた仲間たちの事などお構いなしに、移動中の風景を楽しむために就寝の時間と共に熟睡し、眠たいと目をこするクラスメート全員を叩き起こして移動中のバスから見た景色は今でも鮮明に覚えている。もう30年以上前の出来事になるが、今更ながらあの修学旅行は素晴ら



しいコースであったと、元プロが言うのだから間違いない。あれから、何度か私も仕事で信州を訪れる機会があったのだが、何故だか立ち寄る機会がなく、しかも、一番修学旅行の思い出として鮮明に覚えている場所へ、今回車を走らせてみた。

諏訪ICを出て車を北へ走らせると目的地である白樺湖へは約1時間で辿りつけた。

周囲を山に囲まれた人口湖である白樺湖は決して大きな湖ではない。無いが、その風景たるやまるで絵葉書の如くである。ここからビーナスラインを上り霧ヶ峰に向かう道こそ、私の人生の中で決して忘れる事のない風景の一つである。いや、別に深い意味はない。ただ、人生で初めて女性とツーショットで写真を撮った場所で、楽しかった高校時代を思い出すとき、どうしてもその事を一緒に思い出すっていう、実にノスタルジックな、いや感傷的な、むしろ回顧主義的な、乙女チックと一笑に付されれば風に舞うが如くのセンチメンタルな思い出である。しかし、何と言われようと、ここだけはどうしても今一度来たかった場所であった。予定の変更が功を奏して(実際この地域は翌日から大雪に見舞われている)目に飛び込んでくる風景もあの頃と同じ様にまるで絵画のよう。霧ヶ峰の展望台から南アルプスを望めばはるかに富士山もかすんで見えると言う好条件であった。晩秋の冷たい風が枯草の上を走りながら頬を突き刺す。結局、あの頃と何も変わってない、



悪く言えば成長のない自分がそこにいて、本来ならば腹立たしくあるべきなのだろうが、つい嬉しくなってしまう。そう、基本私の人格の8割程度は高校生の頃に形成され、ほとんど何も変わっていない。最終的なところではあの頃の仲間たちに今でも励まされ、叱咤され、助けられて今を生きている。あの頃と同じ感性で同じ景色を見られるなんて、細やかではあるがきっと幸せな事なのだろう。風は冷たい。だが一人旅でありながら心はそう寒くはない。「また何時か来る事が出来るのだろうか？」そう思いながら一つ思い出を昇

華できた、そんな晴れ晴れとした気分もたまには良いものだ・・・

四 諏訪大社～～信濃一の力持ち～～

霧ヶ峰から諏訪湖へ車を走らせたなら、一度は訪れて観たかった信濃国一宮、諏訪大社に参拝してみる。今回の旅の抑々の目的は伊勢神宮参拝と出雲大社参拝である。しかし、古事記をはじめとする日本の神話を御読みになられた方なら誰でもお分かりになる話だと思うが、お伊勢さんと出雲ではあまりにその出色が違う。純粹に天津神と国津神と言う違いだけでなく、ある意味侵略者と征服されたものと言うほどに違うのだ。まあ、そんな総てをひっくり返して何の蟠りも

無しに「神様」としてお祀りしましょうと言うこの行為こそが、日本的宗教観と言うか、全てに優しい日本人的な美意識であるのだが、どうしてもそういった物語を読んだ側としては一種のわだかまりが存在する。実際、この諏訪大社の御祭神は、国譲りの際に天津神の武甕槌命と争った神様であり、出雲大社の御祭神である大国主命の子ども



であるとされている。どちらも今は有難い神様ではあるが、私なりにバランスを取るつもりで、国津神の神社にも参拝しておこうと言う話だ。御祭神は建御名方神（たけみなかたのかみ）である。今回は時間の都合で上社の本宮のみの参拝であった。信州地方で最も有名な「御柱祭」が開催される事でも有名な神社で、この一の柱は境内に供わっていた。なるほど、国津神一番の力持ちの神様であればこそのお祭りとその柱の大きさを実感した。何とも雰囲気のある静かな神社であった。次回は是非他の関連する三社も参拝してみたい。

伍 高山へ～～上高地は雪の中～～

さて、ここまで来た私ではあるが、この先の行程については一切計画にない。当初の計画通りに名古屋方面に降りるかどうかを迷っているところに、この日数回更新していたフェイスブックを見た高校時代の友人から一通のメッセージが入る。

「高校の修学旅行で言った上高地の美しさは今も健在ですよ」。ならば行くしかないだろう。しかも、そこに行けば必然的に飛騨の小京都と呼ばれる高山にも行く事が出来る。楽な道程ではないが一石二鳥でもある。一路、高速と国道を走らせて上高地に向かう事にした。したのは良いが、松本まで来ると電光表示板に非常に不愉快な文字が見える。

「上高地冬季期間閉鎖中」

いや、まだ冬季期間ではないだろう。と、一縷の望みを託してあの狭い道を上っていたのだが、ここは残念、上高地への



道路は既に閉鎖中であつた。それどころか霧ヶ峰ではあれほど晴れ渡っていた天气が嘘のように、一転俄かに掻き曇り、あろうことか雪まで降り出す始末。驚くしかない。まあ、車でも来難い場所であるが故に守られる大自然の景観であろうが、それだけでなくも運転しにくい道路が雪でも振られたらもう我々九州の人間に運転することは無理だ。況してや、この時点で、私は36時間以上起きているし、運転も17時間しっぱなしだ。上高地に対する未練よりむしろ暖かなベッドに対する憧れが強い。そんな状況であつた。まあ、結果的に松本から高山に抜ける道はこれ一本だし、仕方がないのであるが、さすがに疲労の蓄積する本日最後のドライブであつた。

宿泊に関しては松本駅近くの比較的新しい温泉付きのビジネスホテルが取れ、問題なかったが、さすがに夕食は元気がなく、すぐそばのお好み焼きで済ませてしまった。美味しい飛騨牛のお店やお蕎麦屋さんもあったらうに、これはちょっと後悔の残るところではある。しかしもう限界に眠い。この日の就寝は午後8時。ご高齢者もびっくりと言う時間だが疲れていたからしょうがない。明日は早起きして高山の町並みをゆっくり見学することを誓って爆睡の途に就く私であつた・・・

六 奥飛騨慕情～～観光行政の成功例～～

(旅行第二日目)

昨夜の宣言通り、自分にしては珍しく、モーニングコールも無しに午前7時に目が覚めた。快適な朝だ。と言ってもしっかり11時間熟睡しているのだから当然ではある。

この日は先日の予定通り、先ずは高山の街をゆっくり散策することにした。

先日ある会合で、インドネシアの旅行会社を運営する方とゆっくりお話する機会に恵まれ、その方が話していらっしゃった事であるが「日本の中で最も日本らしい良さを醸し出しているのは高山だ」という事であつた。私も個人的に「仕事で」と言う条件こそ付く

が、日本中を旅させてもらったが、確かに、この高山の町ほど、古き良き日本情緒漂う懐かしい風景を、街全体で見せてくれている所はないように思われる。現地にお住いの方には大変なご苦勞も多いと思うが、



これほどまでに過去の景観を守り続け、観光客を楽しませてくれる街は他にはない。一人旅でもあるし、もともと散歩などと言う健康的な行為を決して自ら望んでしない私のような無骨物であっても、このまるで過去にタイムスリップしたかの如き錯覚に迷い込むこの街並みは、いくら歩いても疲れぬ。観光行政に賭けた人々の偉大さを実感する。

朝市も開催され、早朝だと言いうのにも拘らず多くの観光客が、一軒一軒の古民家に想いを馳せ観光に興じている。レンタサイクルや市バスまで街の雰囲気合わせた配色をしてある様は見事しか言いようがない。見習うべき点は山のようにある。心から感激した次第である。唯一の心残りは、早朝であったが故に、大好物の蕎麦屋の全てが準備中であり、蕎麦にありつけなかった事だ。こんなことなら昨晚のうちに食べてりゃ良かったと思いはしたが後悔先に立たず。未練は未練として納得するしかないのが人生でもある・・・

私が旅行会社に勤務していたころは「白川郷」は唯々マニアックな場所で、商業ベースが最優先される旅行会社のコースでまず立ち寄る場所ではなかった。いや、立ち寄ろうにも、正に陸の孤島。観光地である高山や富山からでも、それこそ何もない道を3時間は走る事になるし、行ったところでドライブインも無い様な、そんな街だった。それが一躍脚光を浴びたのはこの地が世界遺産に登録されてからのことになる。私もこれまで来る機会がなかったので、今回寄り道をしてみようと思ったのだが、今は道路も整備されて近い事と言ったらない。高山から40分程度だ。便利になった。しかしこれはある意味皮肉な話で、陸の孤島であったが故に過去の遺産がそ



のままの状態と保存されていたともいえる。便利になり観光客も多く押し寄せれば、確かに町の財政は潤うだろうが負の側面も付き纏うであろう。この両立をどう図っていくかが今後の課題になるはずだ。ともあれ、さすが世界遺産。合掌造りの集落は見事の一言に尽きる。近代化の波が各地で押し寄せる中で、これほどの住居が、これほどの数現存しているのはまさに奇跡のような光景である。足を延ばす価値あり！の場所であった。ここも何故だか蕎麦屋らしきものを見つけられず、仕方なく道の駅の蕎麦屋で済ますことにしたので一切、味についての期待はしてなかったのだが、このお蕎麦の美味しい事と言ったらなかった。うん、「捨てる神あれば拾う神あり」とは良く言ったものだ。

ここから当然のように車は名古屋へ向かって走る事になるのだが、何故だろう。今でも眼下に焼き付いているのは信州から奥飛騨の山々の絶景だ。頂きに薄ら雪を抱き、澄み切った青空にその雄姿をたたえる緑と青とのコントラストは絶対に忘れられない風景だ。日本の原風景。それがここにあり、私たちを帰郷に誘うのかも知れない。

「やっほ〜！！」

無駄に叫ぶ私は一体何者だ??観光地の凄さとは別に自分にも驚いている。

七 尾張名古屋は・・・

日本の屋根ともいえる北アルプスの山波に別れを告げ、車を尾張平野へ走らせる。日本の中世はここから始まったと言っても決して過言ではない。斉藤道三や織田信長が天多統一へ想いを馳せたこの地ではあるが、私の目的地は戦国時代とは何の関わりも無い。それまでの楽々走れる高速道路から名古屋高速に入った途端に交通量が増し、急に走りにくくなる。しかし目的地はこの名古屋都心のど真ん中、熱田神宮である。

これまた先程の話と同じくどこかバランスを取るような話なのだが、御存じのようにこ



この日本においては三貴神と言われる大変ありがたい神様がいらっしゃる。太陽の化身であられる天照大御神と月、即ち夜の世界をつかさどる月読神。そしてそのどちらとも若干趣の違う素戔嗚尊である。この中で高天原の天津神と国津神とのどちらとも関わりの深いのが素戔嗚尊である。その素戔嗚尊が二度にわたって高天原を追放された際、立ち寄った出雲の国で退治された八岐大蛇の尾の部分から出てきた刀が、後に天孫降臨

の際、瓊瓊杵尊に神の徴として地上に持ち込まれ、大和武尊の東征の際にも大活躍し、現在でも正当なる天皇家の継承の証として用いられる三種の神器の一つである草薙の剣、別名を天叢雲剣と呼ばれるものである。この剣を御祭神として祀っているのが熱田神宮である。今回、大きな神社を参拝して回る以上、地上にもたらされた神の剣を祀る神社を参拝しない訳には行かない。

と言うので、熱田宮を訪れたが、まあその立派な事。その豪華さには驚くばかりである。しかし何よりも感銘すべきは、日本人の信仰は、あまたいらっしゃる神は言うに及ばず、その道具ともいえる剣にまで及んでいると言う、そのこと自体だ。達人は道具に拘る。であるが故にその道具にも神々が宿る。職人の国、日本ならではの信仰と言えるであろうし、それ故にこの国に職人が育ったとも言えるのではないだろうか。日本の神の系統を支える三種の神器の一つを御神祭に祀る神社も訪れた。ここも、車での自由な移動手段を持たなければ来られるはずもない場所だ。気が済んだ。

夕食はSAで名古屋コーチンの親子丼を頂いた。これまた驚くほどに美味しかった。正にサービスエリア侮るなかれ！である。その後宿探しを始めたわけだが、最近のお伊勢ブームのせいもあってか、この日の伊勢市内になかなか空室がなく探すのに大変苦勞した。ようやく見つかったホテルの電話での対応の悪さに嫌な予感を感じたのだが、まあ、雨風を凌げれば良い。そう思って納得することにした。が、あのホテルにだけは今後も頼まれても宿泊しないと誓おう。まあ、それもこれも行き当たりばつたりの予定が無い旅行であるが故の当然の帰結と言うか自業自得なのだが、しかし、予感的中も度が過ぎる私ではある。この勘を何故ほかに生かせないのだろうか？

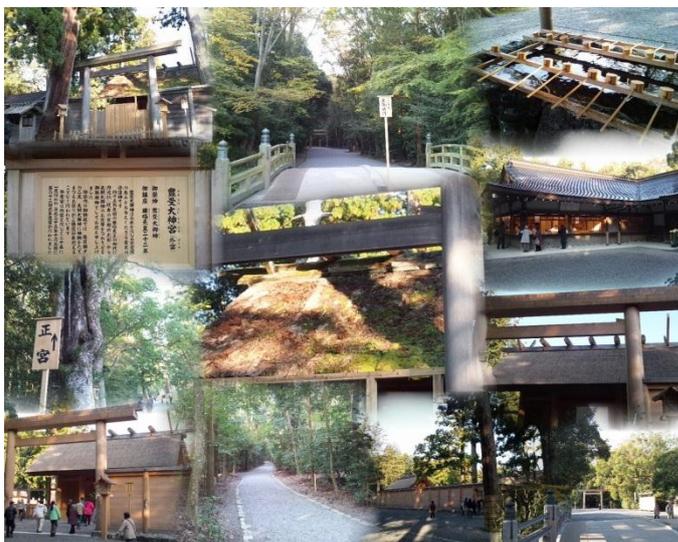


八 お伊勢参り～～色々ありまして～～ (旅行三日目)

あまりに安普請のホテルで寒さに震え、目が覚めれば午前6時。普段なら絶対に起きない時間だがお伊勢参りをするにはちょうど良いのかもしれない。まるで逃げ出すようにホテルを出る私・・・

あまりに有名な話だが、伊勢神宮には内宮と外宮がある。通常の観光コースであれば内宮のみの参拝となるのであるが、今回は気ままな一人旅。時間だけはいくらでもある。しかも、本来作法に則れば、外宮を参拝したのちに内宮を訪れるのが正しいと言われて、そ

れをしない訳には行かないだろう。私は何の迷いも無くまず外宮に向かった。



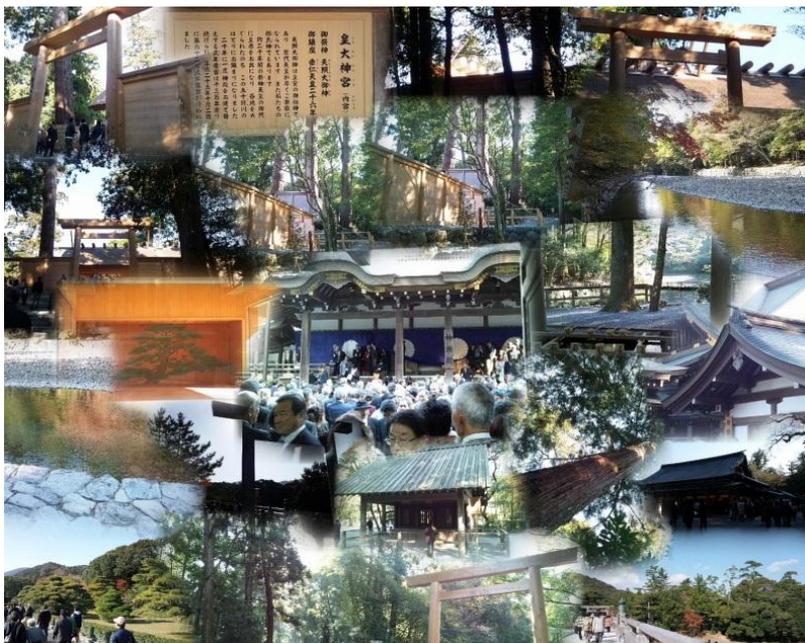
初めての外宮参拝だったので、あらかじめの知識がなかったのだが、今回の式年遷宮ではこの外宮も遷宮が行われていた。以前からの社と新しいそれが並び立つ様は二十一年に一度しか拝めない光景である。御祭神は豊受大御神様で、広く産業の守護神と思ってもらえばいい。内宮に御鎮座される天照大神に御食事を捧げる為にお招きした神様とされている。内宮建築五百年後に造営されたとされている。ここに作法通り

りに参拝できただけでも一人旅で無理をした甲斐があったと言う話だ。境内は鬱蒼とした森に囲まれ、もう神社好きにはたまらない雰囲気だ。

今更のような話でもあるし、実際それが行われているからこの地に足を運んでののだが、今年、伊勢神宮は式年遷宮の年である。二十一年に一度行われる遷宮で神様は新しいお社にお引越しをなされる。今年はその年に当たる為に日本各地から大変多くの参拝客でにぎわっている。私が訪れたこの時も、平日の午前九時と言う早い時間にも拘らずお客様は正に長蛇の列で、江戸時代から続く「お伊勢参り」の精神が今も日本人の心には強く息づいていることを実感する。しかし、この「お伊勢参り」のお客様で成り立っている参道の商店街を「《お伊勢さんの》おかげ横丁」と銘打つあたりは古くから日本人の気の効いているところだと関心をする。人様のおかげを自認している様は実に腰が低くて気持ちがいい。私も常に口では「いや~今私があるのは〇〇さんのおかげですよ！」等と言う、人様から見ればうすら寒い台詞をよく口にしますが、本当にこう思っているなら自らを「おかげ朋之」とでも名乗るような殊勝さを持たなければならない。と、また先日の高山でも感じた古き良き日本の原風景のよ



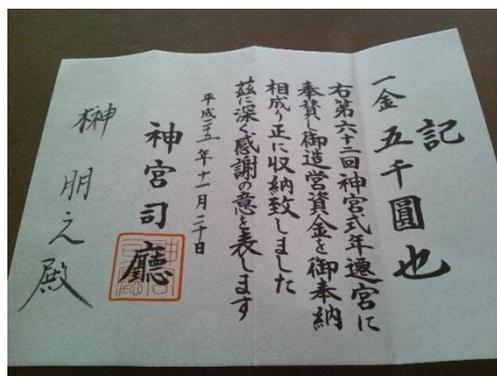
うな街並みを歩きながら痛烈に反省する次第である。さて、いよいよ伊勢神宮を御参りするわけだが、その前に朝食をとっていない事を思い出したので、日本で一番有名な御餅屋さんと言うか和菓子屋さんである「赤福」に入り御餅を頂く事にする。店内ですぐ横を流れる五十鈴川を眺めながら頂く赤福は出来たてだし最高に美味しかった。しかし、こういう時にはつくづく思う。「なんで1人なのだ、俺は!？」



いよいよ、旅の大目的地であり大目標である「お伊勢詣で」を行う事が出来る。いや正に感慨無量だ。この五十鈴川を超える為に、ここまで遥々走ってきたのだ。しかし、先程も触れたが、江戸時代までは皆この行程を歩いてきていたのだ。唯々驚くばかりである。僅か一日走って疲れた等と口走っているようではご先祖様の逆鱗にも触れ

ようって話だ。むしろ、「ここまで楽に来させて頂いてありがとうございます」だろう。

五十鈴川に掛かる大橋を超え鳥居をくぐれば、もうそこからは伊勢神宮の境内だ。ここを訪れるのは実はもう四度目になる。しかし、いつ来ても本当にそう思うのだが、この境内に漂う静寂感と言うか透明感と言うか、心穏やかになれる雰囲気は一体何なのであろう。日本の八百万とも言われる神様の中で最高神と崇め立てられる太陽神であるところの、天照大神を御祭神に頂き、御神体として、昨日伺った熱田神宮の天叢雲剣と共に三種の神器の一つとされる八咫鑑を頂く神社である。心の奥にしみ込んだ日本神道の文化や精神がなせる技なのか、兎に角、この神社は普段何も感じるなどと言う事に無縁な私でさえ、特別な空気感を肌で実感せずにはられないような、そんな独特の空気を漂わせている。我々日本人が意識するとかしないとかに関わらず、正に身に付いた本来形なき者への恐れや尊敬の念まで含めた、美意識や価値観の集大成がここにあると言っても決して過言ではない。特別な何かが目に見えて在る訳ではないが、その無いものに価値を見いだせるそういう空間であると言って良いのかもしれない



い。お引越しを為されたばかりの真新しいご神殿に手を合わせ、前回来たときにもさせて頂いたが、次の御造営に対する寄進をさせて頂きようやく、重かった胸のつかえが下りた、そんな気分である。



さて、本来であればと言うか、通常ならばこれでお伊勢詣では終了と言うことになるだろうが、そこは私。天照大神にお参りをしただけでいい訳もない。と言うのも、この地には、天照大御神とは対照的に夜の世界を司る月読神をお祀りする月読宮が側にある。ここに参拝しない訳には行かない。内宮の駐車場から車でわずか2分足らずの場所に月読宮はある。この神社は伊勢神宮に比べると非常に小さな神社で参拝客も少ないのだが、格式としては伊勢神宮内宮とほぼ同格と言う、国内でも最高位に位置する神社である。宮内には月読宮と並んで、月読様の魂を祀る月読荒御霊宮と、伊弉諾尊、伊佐波尊を其々祀る四宮が並び立つ、日本の神社としても極めて珍しい造りとなっている。これは必見の価値ありの神社であると言える。極めて世俗的な言い方であるが、太陽の神様にも月の神様にも、そしてそれらをお産みになられたご両親の神様にも参拝させて頂いた。後は・・・

九 なら次は～～古の都～～

これほどに有名な神社を回れば、もういいだろう、と言う気がしなくもない。しなくもないが、やはり神代の時代の神社を回ったのであれば、史実にも記載されたような神社を訪れないのも物足りない気がしてくるから不思議だ。まだまだ伝説上の神様ではあるのだが、ある程度記録に基づいていると言うか、現在の天皇家へ繋がるとされる非常に重要な神社が、伊勢から距離的には近いところにある。まあ、十分伝説上の神社と言うことになるだろうが、古事記にも記されている大和武尊の冒険にも匹敵する天皇家の一大物語と言えば「神武東征」が挙げられるであろう。そう、神武天皇ゆかりの地、橿原神宮を訪ねる事にした。これ、先程も距離的と書いたが、直線距離にすると非常に近いのだが走ってみて驚くほどに遠いと言うか時間がかかるの



には正直まいてしまった。しかし、進む以上は引き返せない。行く！

古事記と言うのが、正史として価値があるかないかの議論をするつもりなど毛頭ないが、物語としては非常に面白いものだと思っている。世界中の神話と言うか、現在は宗教の経典となっているものまで含めて考えてみると、やはりイスラム教やキリスト教と言った一神教の神様の絶対的な存在とは違い、多神教の神話にありがちな、例えばギリシャ神話や北欧神話の様な、妙に人間臭いエピソードが多い。特に、この神武東征のエピソードについては、人間臭いと言うよりもむしろ、非常に弱々しさまで感じるような話になっている。地元の豪族に苦しめられ苦戦するさまや、その抵抗があまりに激しく海沿いに遠回りをしてまで上陸地を探



す様は、絶対的な権力者と言うよりも弱者のそれに近い。まあ、それでも神の啓示と言うか、絶対的な神様の導きによって神武天皇はこの地に辿り着き、見事その後この地を治めていくと言う話にはなっているが、この部分は兎に角、神としての絶対性よりも苦労話が多いくらいだ。その意味において、実は私は古事記と言う書物を「時の権力者が都合よく描いた作り話」として片づけられない、ある程度の脚色はあっても史実に基づいた話なのではないかと思っている所以なのだ。まあ、その後実際に飛鳥時代から奈良、平安と続く日本の政治の中心がこの地になっていると言う一点を見ても強ち全てが作り話でもないであろう。まあ、私も若干橿原の地に向かう途中で道に迷いかけたが、やはり八咫鳥のお導きか、無事に橿原神宮に辿り着くことが出来た。有難い。

しかし冗談はさておき、この橿原神宮、来てみて本当にその荘厳さにど胆を抜かれた。何と壮大で重厚な雰囲気漂わせる神社だろう。この造りひとつ取っても、時の天皇がいかにか巨大な権力を手中に収めていたかが手に取るようにわかる。先程、冗談めかして言ったが、苦難を極めた進攻の末に、この地へ神武天皇を導いたものこそ、今やサッカー日本代表のシンボルマークとしてすっかりおなじみの八咫鳥である。当然、この地では八咫鳥の刺繍入りの勝手を購入した。きっと、何にとは言わないが私を勝利に導いてくれるであろう。間違いあるまい。

ふと、気が付けば今日まで余りに神社ばかりを訪れていることに気が付いた。いや、間違いなく今回の旅のテーマは、心の故郷を訪ねるべく、普段行けない大きな神社を訪れる事が目的ではあるし、それで良いと言えば良い。ここでちょっと日本神道の世界に誇るべき良さと言うか奥深さを考えて欲しい。私はその答えは、その懐の深さにあると言って良いと思っている。そう、遥か平城京の昔にあって、時の最高権力者であり、自らが現人神

でもあられた天皇は、仏教と言う異国の宗教をすらお認めになられたのだ。それどころかと言うか、例えば大黒天や弁天様と言う異国の神様を神社に祭り同列の神として祀っている。この事は宗教観における多様性を示している。一神教の宗教であるキリスト教やユダヤ教、イスラム教と言う、固定概念の強さや排他性は持ち合わせていない。これは実に大



きな精神文化における財産である。自らが神であるにも拘らず、その建立を許された日本最古の仏教寺院「法隆寺」を許されたのだ。このお寺を訪れない訳には行かないだろう。何故かここも私にとって初めて訪れる場所でもある。

いや、しかし、ここも凄い。現在では到底考えられないが、一体どれほど、あの当時の権力者は力を持っていたのだろう。と、首を

傾げるほどに、この寺院は圧倒的なスケールで存在している。とても1200年以上前に建てられたものとは思えない見事さだ。巨大な敷地内を包み込む静寂は、感性と言うものに一番縁のない私の様な人間にすら、悠久の時の流れを感じさせずにはいられないほどに肌身に実感として染み入ってくる。ここで、その当時、一体どんな気持ちで、私の様な庶民はこの寺院を見上げていたのだろう。そんなことを考えさせられる空間である。刻を告げる鐘の音が鳴り響いた際に自分の存在の何と儂き事かを実感する。そう、この鐘は私の人生の20倍以上の年月、ここで同じように人々に時間の流れを告げているのだ。何と我人生の儂く、短い事か・・・

あっ、もう日が暮れてしまった・・・

しかしなんだな。奈良って何食べればいいのだ??

拾 本家とでもいうのか～～思えば遠くへ来たものだ～～ (旅行四日目)

前日のうちに本来であれば奈良の行程はすべて終わらせておきたかったのであるが、こちらは私の普段生活している福岡より確実に日暮れが30分は早い。神社ってやつは逢魔の刻以降は入ってはいけないと言うのが基本的な仕来りである。したがって、法隆寺でのんびりしている間に目的地に行き損なうと言うミスをやらかしてしまった。まあ良い。それならそれで今日の目的を粛々とこなすだけだ。

私が現在住んでいて、その町で議員と言う役職につかせて頂いているのは、福岡県の春日市と言うところだ。この春日市、歴史は大変に古い。市の中に国の文化財や史跡指定を受ける程に重要な弥生時代の遺跡が至る所から発見され、弥生銀座と称されるほどの場所である。魏志倭人伝にその名が記され、後漢の帝王より「漢委奴国王印」の金印を送られたとされる奴国がこの地にあったとされている。大和朝廷成立後は朝鮮半島の窓口の那の津と太宰府政庁の中間の地である。この地に派遣されてきた藤原一族が、自らの出身地である奈良の春日地方を思い、一族の氏神様を祀る為の神社を建て、「春日神社」と名乗ったことが、現在も続く「春日」の地名の由来であるとされている。



であるならば、この日本各地に数多く存在する「春日神社」の総本社であるこの神社に私が御参りしない訳には行かないであろう。と言う訳で、最終日は春日大社参りからスタートする。しかしさすがに世界遺産の一つに挙げられている神社である。奈良公園の一角を占める境内も広大だし、建物も何とも言えない趣がある。ここの御祭神は建

雷男神であり、先日参拝した諏訪大社の建御名方神を諏訪湖に追いやった張本人だ。また、彼の刀が前日行った橿原神宮の神武東征の際に熊野で天皇の軍を救ったと言われている。これ程の神社だ。福岡県の春日市の住人としても「福岡の春日もよろしくお祈りします」と御祈りをしておかなければなるまい。しっかり手を合わせてきた。

全く余談になるが、地元の歴史研究者によると、日本各地の春日神社の中で、最も古いのは、総本社である春日大社ではなく、福岡の春日神社であると、そう歴史書にも記載があると言う論争がある。私に言わせると、奈良の春日神社はたまたまその建立の時期に対する記載がないだけであって、藤原氏の氏神様の神社を、奈良の地を想って建てた福岡の春日神社が先に建てられるはずがないと思うし、そうでなければ辻褄が合わないという考えである。筑紫の防人の地に派遣されてくるのは、藤原氏の中でも最重要の地位にいる人間では無かったであろうし、氏神様の神社を他の地に先に立てると言うのは理屈に合わない。大変申し訳ないが、こういった記述というか歴史資料第一主義の研究こそがこの国の歴史家の陥りやすい落とし穴であると言う気がする。形はともあれ、本家である奈良の地でも氏神様を祀る祠があり、それを懐かしんでと言うか、派遣先でも氏神様に御祈りがし

たくてその地に神社と言うか祠を建立すると言うのが自然な流れだ。いきなりこの地に派遣された一族の物が氏神様を祀る神社を建て、それが日本各地に広がったと言うのは無理がある。況してや、今回、この奈良の地を訪れて実感したが、間違いなく当時の天皇家とそれを一番に支える藤原家の権力たるや相当の物であったと容易に想像できる。ここに、氏神様を祀る神社がなかったとは考えにくい。むしろあまりに普通にそこに存在したので別段記載の必要性も無かった、もしくは、それでも一応天皇家の威信に配慮してその記述をしなかったとみるのが妥当ではないだろうか。時の政権の力を示す、最高の場である東大寺の敷地の一角を占めているのだ。力関係は想像に容易い。これ程立派な神社は確かに年代が若干前後する可能性はあるが、奈良の春日神社が以前からあったと考える方が理屈に合う気がする。と、言ったら福岡の春日の人たちは怒るだろうから言わない事にする。

その後は奈良公園を突っ切って東大寺を見学させてもらった。ここはもう時間がなかったので、正に駆け足だったので、ゆっくりと思いを巡らす時間も無かったが、先程も言った通り、1300年以上前にこれ



ほど荘厳でかつ巨大な建造物を建て、その中に巨大な大仏様まで作った時の為政者の権力たるや凄まじいものであったのだろう。これを今の値段に直すとどれほどの公共工事が必要となるのかと考えるに、優に現在の国家予算に匹敵する程度のもので出来たのではないだろうか。いや、国家安泰の為と言いながら一体どれほど庶民の血税を搾り取ったのだ

と言う話だ。公共工事を無駄だとは生まれてこの方一度たりとも思ったことはないが、やはり若干考えさせられる。が、国家予算の全て、現在で考えれば100兆円を支出したとしても、その後、1300年物長きにわたり、この建物は国民に愛されている訳だから、その意味で言えば、毎年の資本投下は800億円程度だ。う~ん、これを高いとみるか安いとみるかは議論が分かれるだろうな・・・しかし、可愛い鹿さんの糞、どうにかならんのだろうか。

拾壹 ならば現代の公共投資は~~橋、橋、橋を走る、走る、走る~~

ここまでの古都、および神社巡りで、実は私の今回の旅の目的は達成されている訳なの

だが、だからと言ってすんなり福岡に帰るようでは、一体何の為に車で旅を続けているんだ、と言う話になってしまう。やはり車で来ている以上、福岡に帰り着くその寸前まで、車でしかできない旅を追求するべきであろう。いや、健康の為にはすんなり帰った方が良い事は充分承知しているのだが・・・



奇しくも、先程、古代における国家的プロジェクトと言うか、公共投資の在り方について論じたので、と言う訳でもないのだが、やはり、古代がああ程度であったのなら現在はどうか、と言うのは気になるところであろう。と言う訳で、車を敢えて大渋滞の大阪の都心を走らせたうえで、日本が世界に誇るべき、巨大公共工事、瀬戸内海に掛かる巨大な3つの吊り橋を制覇しておくことにした。そう、明石海峡大橋、大鳴門峡、そして瀬戸大橋だ。この三つの橋、以前からテレビや新聞等の文化人と言われる人間たちには極めて評判が悪い。曰く「採算性が全く取れない無駄の極致だ」。日本の現在の借金だらけの財政の無駄を象徴する公共工事の例として紹介される事しきりだ。はっきり言おう。これは完全な

暴論だし、公共政策の何たるかを全く理解してない、目先の金にだけ追われた了見の狭い人間の台詞だ。確かに、あれほどに巨大でかつ堅牢で、それでいて機能美にあふれた素晴らしい建造物だ。ここに投じられた建設費が10年や20年と言う期間で回収されるはずもない。むしろ確かにその借金の利子の方が膨れ上がる一面もあるだろう。しかし、勘違いをしてはいけない。採算性が取れない事業であるからこそ公共が行うのだ。良く「一日に車が数台しか通らないところに道路を作るなんてもったいない」と言う意見を聞く。だが考えてほしい。あなたが仮に、その一日に数台の一人、即ち、新設の道路の先に住んでいた人間だとしたら、同じ台詞を言うだろうか。道路がないが故に強いられる苦勞を今の都会に住む人達は知らない。淡路島や、もちろん四国に住む人々にとって、本州と車で結ばれることは正に悲願だ。精神的にも、そして経済的にも、財政の数字だけでは決して測れない恩恵がそこには存在するのは紛れもない事実だ。商品の流通も早まり産業も潤うだろう。労働力の流動だっておこる。事実、今回走って実感したが神戸から徳島まで1時



間程度で着くのだ。これを非難するなら、地方は永遠に座敷牢のように閉ざされた空間の中で細々と自給自足を行うか、それこそ借金背負って大都会の物をひたすら買いまくるしかない。大都会は潤うばかりだ。そんな都会の理屈だけが大手を振って通るような「公共投資不要論」など、地方にしてみれば理不尽極まりない。経済の可能性は膨らむのだ。これを否定する根拠をむしろ示して欲しい。誰でも経験があるはずだ。完成当時は「なんでこんな田舎に4車線もの道路があるの」と思っても、数年経つと見事にその道路が渋滞するほどに利用されることはある。この時、4車線の道路を無駄と言った奴は、その後どんな顔をすると言うのだろうか。道路は正に公共の財産であり、将来的に付加価値を生みながら利用されていくものだ。そして、道路は他の道と繋がってこそ価値を得る。橋はその為の手段だ。これを否定するなら、その川や海で遮断された人間は公共の恩恵を受けるなど否定することになるのだ。そんな無茶はない。



今回、私は神戸から淡路島を抜けて徳島や香川を走らせてもらった。二時間だ。船なら絶対に考えられない便利さだ。ある意味、現代人にとって最も価値のある物は、それこそ値段が付け切れない有効な時間ではないのか。それが将来的にわたって手に入れられて、今時点での借金云々を議論するのは、正にナンセンスだと断言しよう。況してや、これは明らかに職人の国、日本が世界に誇る技術の結晶だし、安心安全の証でもある。洒落ではないが、明石海峡大橋。大鳴門海峡。そして瀬戸大橋。どれも見事に美しい。敢えて言おう。この橋を実際に走って「凄い！」と思わずに「無駄」と思う人間はよっぽど根性が捻くれてる。美しいものは美しい。素晴らしいものは素晴らしい。そう素直に思える自分に感謝しよう。そして、今日も瀬戸内の海は美しい。

拾貳 時間との勝負～～やはり出雲は遠い～～

先日もそうだったのだが、神社に夜は行けない。これは鉄則だ。瀬戸内海の島々と言うよりも橋にうつつを抜かしている間に非常に時間は厳しいことになってきた。ここから、岡山から中国山地を超え、鳥取、そして島根に向かわなければならない。それも日暮れまでに。これを超えてしまうと出雲もしくは松江でもう一泊を強いられることになる。そう、

旅の最終目的地は出雲大社なのだから、ここに行かない訳には行かない。と言うよりも、ここに行かないのだったら、少なくとも車で来た意味さえ喪失してしまう。と言う訳で、決して法定外速度で走った等という事は口が裂けても言えないのだが、若干、急ぎ気味で出雲まで突っ走った。しかし、先程の公共工事の話の延長ではないが、山陰地方の道路整備は他の地域に比べると明らかに遅れている。であるが故に、この地域は距離の割には非常に便の悪い地域となっており、やはり産業の促進や人口増加が望めてないは周知の事実だ。島根県全体の人口が政令指定都市のそれにも達していないのは明らかにインフラ整備の遅れによるものだ。これを、先程の話ではないが「採算が取れない」等と言う理由で放置すれば益々過疎化は進行することになる。決して好ましい事ではあるまい。

何度も触れるが「古事記」はこれまでも常に「時の為政者によって捏造された、権力者にとって都合の良い正史であって歴史的な裏付けはない」と長く言われ続けてきている。確かに、神話時代の話の殆どを信ずるのであれば、これはもう宗教めいた話になってくるので、これが歴史書としての価値を持ちえないと言う理論はある意味正しい。だが、では、全てが創作話であるか、との問いに対して私は「そうとは言い切れない」と言わせて頂きたい。脚色は当然あるとしても、全く根の葉も無い話をあれほど地理的なものまで含めて創作できるはずもない。後の大和朝廷につながる天皇の系譜を正統の物とするのであれば、明らかにこれに対峙する、もしくは匹敵するほどの巨大な権力、それも大和朝廷がそれを無視出来なかった程の勢力が間違いなく山陰地方には存在したと思っている。それは中国山地の豊富な材木を利用して、当時としては最も強力な金属である「鉄」を産出する勢力であったろうし、その証拠はいくつも残っている。その勢力の祭祀として「出雲大社」が存在し、そこを征服した民族も、そこに敬意を表したのか、もしくは怨念を鎮める手段としてかは定かではないが、それらの祭祀も同じ神として祀ったとみるのが真っ当であろう。出雲大社のあの壮大でかつ荘厳な建物の構造ひとつとっても、この地域の豪族がどれほどの力を持っていたかは容易に想像できる。何度も言うが、脚色こそあるが、間違いなく一時期この山陰地方は日本の中心になり得るほどの栄えた土地であったのだ。そこが、現在はこの状況であるのは若干寂しい気がする。

60年ぶりの式年遷宮がなされた本殿に入る事はもちろん叶わなかったが、幸いにもと言うか偶然にも、



参拝所が私以外に誰もいないと言う幸運にありつけた。正に神のご加護だろう。と言うほど信心深くはないのだが・・・三貴神の中でも一種独特の雰囲気がある素戔嗚尊ゆかりの地で、その血を引く国津神最高神の大国主命を祀る神社に参拝できた。神代の時代の天津神から天皇の系譜、そして国津神の主だった神社にも御参り出来た。これで、今回の旅の目的は一応終了である。後は、また近くて遠い福岡に帰るだけだ。

終章 旅の終わりに

まあ、この後は、深夜の高速をひたすら福岡に向かって車を走らせて、この旅は終了となるわけだ。「なぜこんな無茶をしたのか？」良く聞かれる質問ではある。実は自分でもよくわからない。この国の歴史や成り立ちを考えるのは確かに好きである。しかし別に日本神道に執拗に肩入れしている訳では決してない。ただ、古代から現代に至るまでの、この国の精神世界として、と言うよりも根源的な価値観の形成において、その主要部分の大半を占める日本神道や天皇家の存在、そしてその象徴としての神社信仰を考えないで、この国の人間の思考を探る事は出来ないと思っではいる。こう言えば「何言っている！！日本は無信仰、多宗教の国だ」と言うご意見を必ずお受けするだろうが、正にその「無宗教に見え、多宗教を容認する」宗教の形態、それこそが日本の宗教であり神道なのだ。これは、今回多くの神社を見て回る事で実感できた大きな収穫である。また極めて感傷的な思いであるが、自らの人生で最も恵まれていたと今でも思える時期に来た観光地の数々を、それから30年以上経過して、今一度臉に焼き付ける事が出来たのは、我ながら幸運であったと思っではいる。別に思い出に生きるつもりは更々ないが、あの時を永遠として感じる事は私にとっては十分に幸せなことだ。なんだかんだと喘ぎ苦しみながらも、しっかりこうして生きているのだ。まだ無茶がやれる、と言う自信にもなったりしている。

今回最も多く利用させて頂いた施設に、高速のサービスエリアがある。最初の章でも述べたが何処もここも、近年異常と呼べるほどに整備され、ともすればショッピングモールかテーマパークの予想を呈している施設が圧倒的に増えている。非常に快適で利用者にとっては嬉しい限りだ。しかし、島根からの帰り道の中国自動車道路で立ち寄った安佐SAは良く言えば以前からの雰囲気を今も残す施設であり、悪く言えば整備が追いついていないサービスエリアであった。私は以前から、この旧態依然とした少し古臭いドライブインが妙に好きだ。サービスエリアは決して目的地ではない。どこかの目的地に辿り着くまでに、一時的に立ち寄る、



そんな通過点でしかない。ここに、目的を達成するまでの人間が一瞬の憩いを求めて足を止める。希望に燃える者もいる。ただ疲れている者もいる。逸る思いを抑えきれないほどに先を急ぐ者もいれば、自らの重い身体や一向に進みたがらない心に鞭打って次の一步を進めようとする者もいる。一般道のドライブインであれば引き返す事も出来よう。しかし、高速のそこは一方通行で引き返すことは決して叶わない。その先に進むことを仮に拒否するなら、自らが進んできた車をそこにおいて道を外れるしか手はないのだ。これはある意味人生の縮図だ。そんな人間の哀愁を感じさせる、そしてきっと自分自身もそんな雰囲気漂わせている空間が私は昔から好きだ。そう、私たちは誰だって、決して降りる事の出来ない人生と言う一方通行の道路を進んでいる。ただ、別に先を急ぐことはない。疲れたなら、その翼を休めればいい。そしてまた、次の一步を、ゆっくりでも、もしかしたら鉛のように重い足取りでも進んで行けばいい。長時間の運転で心底疲れ切っているはずの身体なのだが、妙に昔じみた何の飾りも無いカレーライスがやたらと染み渡る。明日からまた、自らの為すべきことを粛々とこなしていく。そんな思いを強く持てた、そんな、やっぱり「心の旅」だったのかも知れない。

「また行けるかな」「いや、もう無理だろう」そんな自問自答を繰り返しながら、きっと私がいつまでも私であれば、同じことを繰り返すのだろう。その時は又、お付き合いください。

長旅の、そして長文のお付き合い、本当にありがとうございました。

《旅の記録として》

旅行時間：四日間（96時間）

走行距離：2750km

通過もしくは立ち寄った府県：福岡、山口、島根、広島、鳥取、岡山、兵庫、香川、
徳島、大阪、奈良、三重、滋賀、愛知、岐阜、長野

撮った写真：約300枚（殆どが無駄になった）

食事：きしめん、更科蕎麦、お好み焼き、飛騨蕎麦、飛騨牛飯、名古屋コーチン親子丼
伊勢蕎麦、てんむす、みたらし団子、赤福（3個）、モスバーガー、鹿せんべい、
明石焼き、出雲蕎麦、カレーライス・・・（貧相極まりない）

行方不明中の4日間で掛かってきた電話：2本（私は世の中に本当に必要なのか？）

最大の旅の教訓：行き当たりばったりも人生じゃないか！！